

日本社会心理学会会報

200号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル 同志社大学社会学部 池田研究室

2013年12月16日

日本社会心理学会第54回大会、 盛会でした!!

2013年度の年次大会は、2013年11月2日(土)、3日(日)の2日間に沖縄国際大学で開催されました。温もりのある空気、雲が足早にわたる青い空、そしてキャンパス横には普天間基地。沖縄という地について改めて考えさせられるひとときでもありました。以下のお二方の印象記で、熱く深く交わされた研究交流のようすをお楽しみください。大会準備委員長の大城亘武先生、事務局長の山入端津由先生をはじめ運営委員・スタッフの皆様のホスピタリティ溢れる大会運営に心より感謝申し上げます。

大会印象記1

小城英子

社会心理学会第54回大会は、発表件数も多く、懇親会もあふれんばかりに盛況で、沖縄大会に対する会員の期待と満足が感じられた。

今大会で印象深かったのは東日本大震災に関する一連の研究である。ストレス研究、リスク研究、メディア研究など、多様な側面からのアプローチが見られた。自分自身が阪神・淡路大震災(1995年)当時に神戸にいて、災害研究のあり方にはいろいろと考えるところがあったのだが、一言でいえば、被災地の研究は被災地の研究者を中心に息長く、非被災地の研究者は非被災地でできること・非被災地でやらねばならないことを、あるいは被災地の研究者の後方支援を、というのが個人的な結論である。理屈の上では外部の視点も有益であることは自明の理であるが、非被災地の研究者はどんなに心を尽くしても被災地にとっては外集団であることは否めない。被災地の研究においては、研究者自身も被災地とともに生きる立場にあることが第一義に重要だと思う。被災地と非被災地がそれぞれ役割分担しつつ、ともに連携・協同して災害心理研究の発展と災害からの復興支援がなされることを願っている。

もうひとつ印象深かったのは大会シンポジウム「見える沖縄、見えない沖縄」であった(写真)。私の大学院の同期に、琉球大学出身の友人がいる。大学院で一緒に過ご

していたころ、折しも米兵による少女暴行事件が県外でも大きく報道されたこととも相まって沖縄問題は身近に感じられ、以来、研究とは別に個人的に関心を持っていたテーマである。シンポジウムでは政治学、経済学、社会心理学、工学の分野から話題提供が行われ、限られた時間ながら沖縄問題の複雑さを改めて認識することとなった。沖縄問題に対する県内と県外の温度差はよく指摘されてきたが、県内においても世代間で格差が拡大しているという。沖縄が返還されてから41年、若い世代にとっては物心ついたときから基地が生活の中に入り込んでおり、基地依存度の見積もりが実態よりも過大になる傾向があるようだ。パネリストに「沖縄問題に社会心理学が貢献できることは何か」という質問を投げかけてみたところ、基地依存度の見積もりのズレがどこから来るのかメカニズムを解明してほしい、沖縄をテーマとした研究が増えてほしい、など貴重なアイデアをいただいた。



シンポジウムの最後は、司会の中村先生が、前日に行われた特別講演「Included But Invisible? The Benefits and Costs of Inclusion」(写真)から引用して「県外も県内も、そ

● 今号の主な内容

- 【1面】日本社会心理学会第54回大会、盛会でした!!
- 【2面】2013年度日本社会心理学会賞第15回選考結果
- 【5面】会報200号刊行記念特集
- 【11面】祝・山岸俊男会員文化功労者顕彰
- 【12面】「春の方法論セミナー」ご案内
- 【12面】『社会心理学研究』掲載予定論文、新入会者名簿など

れぞれのアイデンティティを尊重しつつ、同胞としてよき理解者になってほしい」と締めくくられた。私の友人は今大会のスタッフに名を連ねており、久々の再会を喜びながら、同胞のいる沖縄との心理的距離は近いと改めて感じた。



東北に対しても、沖縄に対しても、「社会」に対して「社会」心理学はどんな貢献ができるだろうか。個々の研究発表を超えて、メタレベルでの課題を考えさせられた沖縄大会であった。

(こしろえいこ・聖心女子大学)

※写真提供：大会事務局

大会印象記2

李 楊

「この惑星の住民は、どんなに通信手段が進んでいようと、会わないと始まらないらしい。」小春日和の朝、沖縄国際大学の正門を眺め、タクシーの扉に寄りかかって某缶コーヒーをぐいっと一口飲む。そんな宇宙人を背に、PCやらMacやらバズーカのようなケースやらを抱えいそいそと「日本社会心理学会第54回大会」の看板を通過する我々は、だれかに会い、何かを学ぶために、日本中(場合によっては世界中)から集まってきた。



「次どこ行く？」
「ここで最初の発表を聞いて、こっちに移動して、最後までってくるわ。」「それ聞きたかった！後で教えて！」そんな会

話があらこちらで聞こえ、手元のプログラムにはいろんな記号とメモが書き込まれていた。咲き乱れる並行セッションからいかに効率よく情報を得るか、もはや職人芸に近い。共通の関心に関する最新の情報が行き交う場は、もちろん参加者が多い方がいい。しかし一方では見に行きたかった「裏番組」を思うとソワソワが止まないのも、人のココロ。

ふと、真っ黒なスーツを纏うニューフェイスが視界に入る。歩く若葉マークのような彼・彼女らは期待と緊張と不安が入り混じった神色でやや硬直気味。いつしかの自分もきっと、そんな風景の一部だったに違

いない。しかし院生5年目ともなれば「スーツで学会出席の規範の再生産」の話題で後輩に愛情たっぷりな揶揄を送る余裕も出てくるものだ。一年一年の学会が成す階段をがむしゃらに登っているうちに、棒読みしない口頭発表ができ、質疑で頭が真っ白にならなくなり、コメントの内容と背景と文脈が汲み取れたりするものだ。

一方では階段のずっと先を上っている先輩方が主催するWSで陣取り、俯瞰的な視点を先取れる。工学×心理×哲学、文化×神経×遺伝×発達のような、目の前に分野間の融合がSFのように進んでいる。ただの盛り合わせよりずっと難しいはずの融合は、不確実を帯びる希望を人参のように目の前にぶら下げてくる。それに向かって走る時には羅針盤をしっかり確認しないとダメよと、先輩たちの姿が語っている。

一日のスケジュールを終え、懇親会の時間になると、みんなの表情が緩み始める。泡盛を片手に、会話は花を咲かせ、ネット

ワークが毎年最大の成長期を迎える。「はじめまして」や「最近どうですか」が交わされ、最新の実験結果から「例の話」の裏話まで、どこまでも盛り上がり続けたりもする。夜の街のどこかで開かれる二次会も、結局は話したりすることがない。

翌朝目の下にクマさんを抱えつつ発表に出向き、また会場間を走り回る。一息ついて潜入した効果量のWSではまるで教科書が勝手に頭に飛び込んでくるようでありがたい。もっと早く聞きたかったよと、思わず目がうるり。

そうこうしていたら二日目もあつというまに終わりを迎え、「また会おう」を手土産に帰途に立つ。振り返れば、そこは舞台であり、戦場であり、社交場であり、教室でもある。だからこの惑星の住民は学会という場で成長するらしい。年年歳歳花似たり、歳歳年年、自分同じからず。さて、次の階段は、どこに続くものだろうか。

(りょう・北海道大学)

第54回大会実施概要報告

期日：2013年11月2日～3日

会場：沖縄国際大学

準備委員長：大城亘武(沖縄キリスト教学院大学)

事務局長：山入端津由(沖縄国際大学)

副事務局長：泊真児(沖縄国際大学)

事務局幹事：中村完(琉球大学)

1. 参加者数: 711名

(予約参加者 542名、当日参加者 167名、招待参加者(名誉会員等) 2名)

2. 発表件数: 480件

(発表申込件数: 488件)

3. 発表取消: 8件(内、ポスター発表の小森めぐみ先生のご発表はプログラム編成段階での取消である。よって、プログラムと大会論文集では欠番となっている。)

《口頭発表》

20-01 板山昂(神戸学院大学) 評議内容の提示が裁判員裁判の判決に対する一般市民の評価に及ぼす影響

31-04 佐藤剛介(北海道大学) 他者志向的不安に対する社会生態学的アプローチ

《ポスター発表》

P01-52 高橋健太・安念保昌(愛知みずほ大学) ブラジリアン柔術を通じた日本・伯の交流

P02-14 志岐裕子(長崎純心大学) テレビ番組を話題としたコミュニケーションに関する検討
P03-57 高木彩・小森めぐみ(千葉工業大学・千葉大学) 命令的規範と記述的規範の影響過程に関する検討(2)

P04-27 眞嶋良全(北星学園大学) 認知能力と思考傾向は疑似科学への信奉を規定するか

P04-34 小森めぐみ(千葉大学) 物語への移入が後続する説得メッセージの受容に及ぼす影響

P04-48 川角公乃(学習院大学) 意見・態度変容に影響を及ぼす社会的・認知的葛藤の表出形態について

2013年度日本社会心理学会賞 第15回選考結果のお知らせ

今年も例年にならった方法により論文賞および出版賞の選考が行われました。慎重に審議した結果、優秀論文賞については該当なしとなりましたが、奨励論文賞ならびに出版賞については下記の各論文と著作が授賞対象として選出されました。

■受賞論文、受賞書籍

○優秀論文賞 該当なし。

○奨励論文賞

『経済格差の是正政策に対する人々の賛意：機会の平等性と社会階層の認知が責任帰属に与える影響の検討』 橋本剛明・白岩祐子・唐沢かおり(第28巻1号掲載)

『物語の構築しやすさが刑事事件に関する

判断に与える影響』 浅井暢子・唐沢 穰(第28巻3号掲載)

これら2論文ともに、社会心理学の研究論文としての完成度の高さに加え、扱っているテーマや着想自体の新奇性が高く、かつ興味深い内容であることがまず評価された。加えて、関連諸科学に対しても有益な貢献をなす可能性を持つものであり、さら

なる研究知見が蓄積されることによってより確かな貢献をなし得るものとなることから、奨励論文賞を授与するにふさわしい論文であると評価された。

○出版賞

『格差と序列の心理学：平等主義のパラドクス』 池上知子(著) ミネルヴァ書房

「平等を願う心理が不平等や格差を生み

出し、維持・増幅させるというパラドクス」について、社会心理学の諸理論を織り交ぜるとともに、著者自身の研究知見も踏まえながら、非常に精緻な論理展開を図っている。また、判りやすい語り口で豊富な研究例が紹介されており、社会心理学の専門家だけでなく初学者、さらには一般読者にとっても興味・関心を持って読まれていく可能性を持っており、出版賞受賞に値する著作であると評価された。

『存在脅威管理理論への誘い：人は死の運命にいかにか立ち向かうのか』 脇本竜太郎 (著) サイエンス社

「存在脅威」という社会心理学において非常に重要な位置を占めながらも難解ゆえに敬遠されがちな理論を、行き届いたレビューに基づく豊富な資料を用いながら、初心者にも判りやすく説明している。また、存在脅威に「対処するには」という前向きな視点も評価された。これらの点において、日本語による同理論の先駆的業績として出版賞受賞に値する著作であると評価された。

○選考委員会

委員長：浦 光博

委員：

理事：大沼 進、外山みどり、橋本 剛*、向田久美子、元吉忠寛*、森津太子

会員：大江朋子、金政祐司*、森永康子* (以上編集委員)、石黒 格 (過去の受賞者)] (*出版賞選考小委員会委員)

(文責：浦 光博・編集担当常任理事)

■受賞者の声

奨励論文賞を受賞して 橋本剛明

この度は、栄えある論文賞を賜り、大変嬉しく存じます。ご多忙の折に拙稿に目を通し、選考いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

此度の朗報に至ったのは、沖縄大会前日に催された院生リーグの後、深夜にメールを確認した時でした。驚きと強い喜びをおぼえた一方で、例年通りならば懇親会で「スピーチ」を求められることに戦々恐々とし、学会発表の練習は後回しで挨拶の内容を考えることにその晩は費やすこととなりました。当日の懇親会では、重圧からろくに食べ物もノドを通らず、お声がかかる時を待っていましたが、素晴らしい琉球の舞踊や、琉球空手の迫力満点の演舞が壇上で披露されるたびに、自らのハードルが上がる

ように思われ、「空手に対抗するにはもはや『少林寺拳法2級』の腕前を披露するしかない…」という考えも脳裏をよぎりました。結果的に今年はスピーチそのものがなく、ホッとしたような残念なような、複雑な気持ちのまま、諸先輩方との二次会で飲み直したのも、今となっては良き思い出です。

前置きはこのぐらいで。肝心の論文は、人々が貧困の是正に向けての賛意の規定プロセスを探ったものです。経済学などの領域では、格差の本質的問題は、所得の相対的な不平等ではなく、教育や就業の機会における構造的な不平等であるといわれています。本研究は、そのような「機会の不平等」に対する人々の認知をモデルに含め、検討しました。本研究で特に明らかになった点は、自身の属する社会階層を高く認知する個人は、個人的統制の効かない出自や性別といった要因でも、機会の不平等を損なうものとは捉えないということです。この知見は、高階層者ほど自らの立場を合理化し、統制不能な要因でも自助努力で乗り越えられると考える傾向を示唆します。本研究は、何を「機会の不平等」と見なすかについて、自己の階層認知に基づく認識の差異が存在するという「心理学ならではの」知見を提供し、経済学などを中心とする議論にさらなる理論的展開の糸口を提起し得たものと感じます。あくまで私見ですが、その点をご評価いただき、此度の受賞に合ったものと思っております。

末筆ながら、本プロジェクトに関わった全ての方々に感謝を申し述べたく存じます。本研究は、唐沢かおり先生と白岩祐子氏と二人三脚で企画・実施し、時に喧々諤々の議論を経て、形にすることができました。共著者ではありますが、お二方にはこの場をお借りし御礼申し上げます。また、同輩の渡辺匠氏をはじめ、院生と学部生、研究室スタッフのお力添え無くして、調査の遂行は不可能でした。改めて深く感謝いたします。また、熱心に論文をご査読いただき、論文の完成度を高めていただきました。私事ですが、最近はじめて査読に携わらせていただき、その大変さを痛感した身としては頭が下がるばかりです。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

(はしもとたかあき・東京大学)

奨励論文賞を受賞して 浅井暢子

このたびは社会心理学会奨励論文賞という名誉ある賞を賜り、誠に光栄に存じます。選考いただいた諸先生をはじめ社会心理学会の関係者の皆様に御礼申し上げます。

本研究は、裁判員裁判の中で法学の専門知識を持たない人々が、大量の事件情報をどのように処理し、被告人や被害者に対する心証を形成しているのかという問題に焦点を当てたものです。アメリカ国内の一般市民を対象とした研究では、人々が証拠や証言を主観的な因果関係で結びつけることで、犯罪行為の経緯を説明する物語的表象を構築しており、この物語に基づいて被告人の罪名(例、第一級殺人罪、第二級殺人罪)や有罪・無罪の判断が行われるとの知見、すなわちストーリー・モデルが示されてきました。本研究では、このような認知過程が、陪審員制度という司法への市民参加システムが馴染んだアメリカの社会的環境によって培われたものではなく、日本の一般市民にも一般化可能な裁判情報の理解と判断の方略であり、かつ物語の構築は被告人に対する量刑判断や被害者認知にも影響を与えているとの新たな知見を実証的に示しました。裁判員裁判制度は実施から4年が経過しましたが、運用の状況を見たいと、必要に応じて見直されていく見込みです。「奨励」論文賞という名に見合うよう、今後も精進を重ね、本分野に対して社会心理学の基礎研究の知見を発信していきたいと考えております。

この研究は、私どもにとって初めて「法実務」にかかわるテーマを扱ったものです。論文執筆の際には、裁判員制度、刑事訴訟法、量刑に関する諸理論などに関する知識不足をあらためて思い知らされ、論文や資料を読み込む作業に多くの時間を費やしました。他にも、経験したことのない苦労がありました。研究を通じてこれまでほとんど交流のなかった、弁護士や検事といった実務家の方々と議論をする機会にも恵まれました。その中で感じたのは、実務家の方々が心理学の知見に深い興味関心を持ち、裁判員制度の運用と改善に活かそうと頭をひねっているということです。多くの先生方がすでに法学と心理学の懸け橋となって活躍されておりますが、拙稿も本分野への関心の高まりに少しでも貢献できれば幸いです。

最後になりますが、共著者であり、大学院生時代の指導教官でもある名古屋大学の唐沢穰先生のご指導と（互いに）胃が痛くなるような議論が本論文の礎になっております。査読者の先生方には長い期間にわたって本論文にお付き合いいただき、論文の質が高まるように導いていただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。また、研究の実施と論文執筆にご支援とご協力をいただいた神戸大学、名古屋大学、東北大学の心理学研究室関係者の皆様と学会等で議論させていただいた皆様に感謝申し上げます。

(あさいのぶこ・京都文教大学)

出版賞を受賞して

池上知子

このたびは、2013年度日本社会心理学会出版賞を賜り、大変光栄に存じます。選考いただきました諸先生方、ご関係の先生方には、心より感謝しております。本来であれば、授賞式に出席し皆様に直接お礼の言葉を申し上げるべきところ、勤務校の用務のためそれが出来ないませず、申し訳なく思っておりました。この場をお借りして、あらためてお礼を申し上げます。

すべての人間が等しく富と幸福を享受できる社会を理想とする平等主義に異論を挟む人は少ないのではないのでしょうか。けれども、現実の社会には、さまざまな格差や不平等、また差別が厳然たる事実として存在します。多くの人たちが平等な社会を望んでいるのに、なぜそれが実現しないのかという、きわめて素朴な問いに答えることが本書のねらいでした。そして、平等を阻む真の敵は、平等を願う人々の心の中に潜んでいることを説き、そのようなパラドクスが生じるメカニズムを、社会心理学の最新の研究成果を参照しながら、また私自身の研究成果を踏まえながら、解き明かすことを試みました。

私がこのような内容の本を書いてみようと思ったりしたのはいくつか理由がございます。ひとつは、格差・不平等問題は、多くの論者が、さまざまな観点から論じておりますが、心理学的視座から考察しているものは少ないように感じたからです。一般に、心理学は、他の社会諸科学に比べ現実の社会問題、とりわけマクロな社会問題への寄与が希薄であるかのような印象をもたれています。特に、私の専門分野である

基礎的理論的志向性の強い社会的認知研究は、そのような批判を受けることが多いように思います。けれども、私は、個人の認知機制と社会のマクロ構造とは密接に結びついており、ミクロな心理過程にみられる特徴はマクロな構造を生み出す重要な要因の一つであると考えております。もちろん、その逆もありえるでしょう。本書により、そのような相互関連の具体的な姿の一端を示したいと思いました。もう一つは、私は、これまで自分自身の研究の成果を学術雑誌に発表することはあっても、広く一般社会に発信する努力をあまりしてきませんでした。最近では、研究の成果を社会へ還元することが強く求められようになっております。そうした趨勢に鑑み、反省の意味未もこめて、小著を公刊させていただいた次第です。私のこのささやかな挑戦を社会心理学会の皆様が評価して下さったことは望外の喜びでした。しかしながら、私の力不足から、まだまだ不十分な点が多々ございます。今後さらに精進して参る所存です。

最後に、本書の出版にあたり多大なご尽力をいただきましたミネルヴァ書房の方々にあらためてお礼を申し上げます。また、大阪市立大学大学院文学研究科の社会心理学ゼミのメンバーの皆様にも感謝の意を表したいと思います。彼ら、彼女らと日々行う議論が、今の私の知的興奮と研究意欲の源となっているからです。

(いけがみともこ・大阪市立大学)

出版賞を受賞して

脇本竜太郎

この度は2013年度社会心理学会出版賞を賜り、大変光栄です。審査委員の先生方、ならびに社会心理学会関係者のみなさまに感謝申し上げます。個人的なことから、沖縄は妻の故郷でもありますので、感慨も一入です。

『存在脅威管理理論への誘い』というタイトルの通り、本書は当該理論の入門書です。存在脅威管理理論は、ミクロな視点で捉えれば、自尊感情とその基盤である文化的世界観が、存在論的恐怖（死の不可避性の認識によって生じる恐怖）を緩衝する機能を持つと主張する心的防衛の理論です。しかし、より重要なのは、存在論的恐怖を緩衝する機能という点から自尊感情への欲求を捉え、人間の社会的行動の統合的説明を模索するグランドセオリーであるという

側面です。理論の基本仮説については既に多くの実証研究が行われ、存在論的恐怖が自尊感情希求や文化的世界観防衛行動を動機づけること、またそれらの行動の遂行が存在論的恐怖を低減することが示されています。さらに、そのような影響の認知プロセスも明らかにされています。本書の前半部分では、理論の基礎部分であるこれらの知見についてまとめました。

一方で、理論の基礎部分を解説しただけの入門書ではなく、読者の方に身近な話題に引きつけて考えながら読んでいただける本にしたい、という思いもありました。そこで、後半の4つの章では、比較的新しいトピックの中から身体性、関係性に関する知見と、9.11テロ後のアメリカにおける政治的保守化や外集団差別の激化について取り上げました。これらの話題は、日常を生きる個人として自己、対人関係、社会について考える上で重要な示唆を含むと考えています。

理論の発表から20数年を経て、存在脅威管理理論に基づく研究は広く展開し、存在論的恐怖が様々な社会的行動に影響を及ぼすことが明らかにされています。一方で、外集団排斥など存在論的恐怖の否定的影響を乗り越える方策や、近年明らかにされつつあるノスタルジアや自己一貫性の存在論的恐怖緩衝効果が、自尊感情、文化的世界観、関係性の効果とは独立のものなのか否かという点など、検討課題は残されています。また、存在脅威管理理論と他のグランドセオリーとの関係も整理する必要があるでしょう。今後これらの研究課題に取り組みされる方に、日本語で手軽に利用できる資料として本書をお使いいただければ幸甚です。また、隣接領域の方々にも、人間の有り様を捉える1つの枠組みとして、存在脅威管理理論を知っていただくきっかけになればと思っています。

最後に、執筆の機会をくださいました安藤清志先生、松井豊先生に感謝申し上げます。サイエンス社編集部の清水匡太様、谷口雅彦様には編集の過程でお世話になりました。記してお礼申し上げます。そして、草稿を読んでコメントとあたたかい励ましをくれた妻にも、この場を借りて感謝を伝えたいと思います。

(わきもとりゅうたろう・明治大学)

会報 200号刊行記念特集～社会心理学の「現在・過去・未来」～

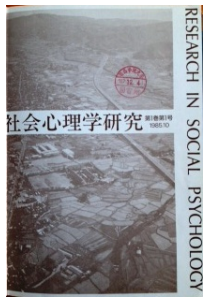
本会報はその前身「社会心理学懇談会会報」(1956年12月20日創刊)から数えて200号を迎えました。100名に満たない有志によるごく小さなコミュニティとして始まった会は、50有余年を経過した今では会員数1800名以上を数え、名実共に学会＝ソサエティとなりました。学界全体で急速に進む国際化・学際化の流れとも相俟って、社会心理学を標榜する学会がいかにあるべきか、会を構成する研究者たちがいかに活動すべきか、従前よりも強く問われています。そこで、200号刊行を記念して、複眼的な視点で社会心理学(界)を見つめ、これまでの歩みを振り返り、現在の姿を描き出し、将来を展望することを目指した3つの特集記事を企画しました。

(1) 歴代編集委員長が語る、『社会心理学研究』と社会心理学のこれまでとこれから

機関誌『社会心理学研究』が、25号まで刊行された『年報社会心理学』を経て新たに創刊されたのは1985年。会報100号で「学会の未来に向けて」と題した特集が組まれたのと同じ年です。つまりまもなく30巻を迎える社心研の歩みはほぼそのまま会報100号分の歩みと軌を一にしています。そこで第1特集では、社心研の歴代編集委員長6名と現編集委員長に、学会活動の中核である機関誌編集に深く関わる経験をなされたお立場から、社心研さらには学界の将来展望についてご寄稿をお願いしました。

未開の沃野の開拓を夢想する

永田良昭 (1994～1995年度編集委員長)



2011年リンゼイ (G. Lindzey) の名を編者にとどめる最後の『社会心理学ハンドブック』第5版が刊行された。初版と同様「社会心理学の歴史」(Ross, L., Lepper, M., and A.

Ward) が第1章である。ただし、アメリカの社会心理学史である。社会心理学の背後には研究を触発した社会状況があるとして、背景である[アメリカに社会に関わる]社会状況とその時期に端緒を開いた研究課題、理論が年代史風に列挙される。例えば、1930年代は恐慌、ファシズムの台頭を挙げ、権威主義 (T. W. Adorno)、同調行動 (M. Sherif) 研究が記載される。社会状況としては、第二次世界大戦、ホロコースト、冷戦、テレビの普及、マッカーシズム、公民権運動、ベトナム戦争、自己中心世代 (“Me” generation)、東アジア諸国の台頭、9/11テロ、インターネットと携帯電話の普及等々がある。

一読して、少なくとも三つの論点があると感じた。第一は、社会心理学が人と社会の関係の理解を目指すとするれば社会史的背景の吟味は当然の姿勢であろうということである。しかし難問ではあるが、背景と研究の関係は直観と常識に依っているのは物足りない。

第二は、この論理の延長上には社会心理学の資料理解にも時代の社会状況への目配りが必要な場合があるという問題が提起されることである。統計数理研究所の「国民性調査」は時代による人生目標や生活態度の変化

をとらえることを意図している。実験であれ調査であれ、結果の一般化に際してその時代の社会状況への目配りが必要ということである。

第三に、上記に答える資料として、政治史、経済史などが記述する社会状況が必要十分な情報源になり得るかが問われるように思われる。その理由を論理的に述べるには紙幅が足りない。いわゆる「血液型性格関連説」の流布に関する筆者の試論を述べることで大方の理解を得たい。いわゆる「血液型性格関連説」が世の中に流布し、話題性を得たのは1930年代の数年間と1970年代から80年代にかけての二つの時期である。第一の時期は、「妻や子供を連れて物乞いをしつつ徒歩で故郷を目指す失業者たちに街道筋の人々が炊き出しを行っている」と報道された不況、失業の時期である。第二の時期は高度経済成長の末期で、親が経験しない高学歴化が急速に進行した時期である。この二つの時代の社会状況は、現象レベルではかなり異質に見える。しかし、多くの人が親の世代の体験しない未来に直面して先の読めない手探りの状態にあったという意味で類似している。こうした人々に擬似的に自己の将来像を与えたのが「血液型性格関連説」であるという仮説 (永田、2003、2005 [学士会報]) である。社会心理学からみた社会状況の意味は、現象の近似性だけでは速断するわけにはいかないのではないだろうか。歴史的事実を社会心理学的に再解釈する努力が必要な場合がある。「過去と現在の対話」(E. H. Carr, 『歴史とは何か』1961: 訳書 1962) としての歴史は、対話の文脈に応じて読みとれる内容が異なり、それは現代理解の視点にも影響するかもしれない。これは「社会心理学」の守備範

囲ではないとする意見もあろう。しかし、「人と社会の関係」の理解を目指した社会心理学の開拓者の意図を一層深く実現させる可能性があるかもしれないと思う。

広報委員会から『社会心理学研究』誌、日本社会心理学会、または社会心理学に期待するところを述べよとの難問を頂いた。課題や方法を抽象的に語ることは容易であるが空理空論は避けたい。試論にすぎない具体的な事例を挙げた所以である。

(ながたよしあき・学習院大学名誉教授)

※永田先生による「日本社会心理学会小史」を『社会心理学事典』(丸善)でお読みいただくことができます。

常任理事としてのふたつの経験

大淵憲一 (1998～1999年度編集委員長)

広報委員の方から編集長経験者として機関誌の今後のあり方について考えを述べていただきたいとの依頼がありましたので、当時の経験を振り返り、論文審査について述べてみたいと思います。また、ご依頼の範囲を外れますが、引き続いて担当した事務局当時の経験についても記させていただくことをお許ししたいと思います。

私が編集委員長になりましたのは、編集委員会が大きな問題を抱え、機関誌に対する会員の信頼が大きく損なわれていた時期でした。問題というのは、審査を終えた論文が刊行される際、著者に無断で修正が行われたというもので、結局、その機関誌は刷り直しとなりました。こうした問題が起こった背景には、当時、論文審査を、教授が学生に論文指導するように、経験者が初心者の論文を指導・添削してあげる行為のように認識していた向きがあったものと思われます。

体制の立て直しを任された私は、ピアレビューという原則に立ち返り、投稿と審査を研

研究者たちが対等な立場で議論を行う場として活用することを目指して、現在のような社心の審査体制を作りましたが、このために、個別論文の責任を担う主査の役割、適切なコメントを作るガイドライン等の整備を行いました。私としては、欧米の主要論文の審査制度にもっと近づけたかったのですが、当時の社心会員の力量、論文審査を担う大学教員の境遇などを考慮に、折衷的なものとならざるを得なかったことなど、心残りな点もあります。論文投稿は会員にとって主要な権利でもあることから、新審査体制の下でも個別のトラブルは避けられないものでしたし、現在もそうであろうと思います。今後も、建設的な議論の場として論文投稿が利用され、原則に従った審査が行われることを期待します。

続いて事務局担当の常任理事となった際には、学会の財政悪化に直面し、経費削減が重要課題でした。当時、社心だけでなく多くの学会は公益法人学会事務センターに事務委託をしていましたが、その経費が大きな負担となっていました。その際、機関誌印刷でお付き合いのあった国際文献印刷社(現・国際文献社)の笠井氏(現社長)に話をしたところ「うちでやってみましょうか」と言われ、この機会に学会事務の職務整理を兼ねて彼と打ち合わせを重ね、会長、常任理事の方々のご理解を得て、事務委託を同社に変更しました。その数年後、学会事務センターが破綻して、学会の中には預け金を失うという被害に遭ったところもありました。先見の明があったわけではないのですが、社心がそうした被害を回避することができたのは幸運だったと思っています。その後、国際文献印刷社が、社心をテスト・ケースとして学会業務に本格的に乗り出し、学会事務センターの破綻を背景に事業を拡大して、この業界の主力企業に成長してきたことはご存じの通りです。しかし、私の経験から、学会側も財産管理を任せっきりせず、自己管理体制をしっかりすることが必要と思われる。

(おおぶちけんいち・東北大学)

“古き佳き”時代の『社会心理学研究』誌 高木 修(1999~2000年度編集委員長)

私は、第20期理事会(1999年4月~2001年3月)の常任理事(編集委員長)として、会誌の発行を担当した。しかし、定年退職を機に委員会資料は全て廃棄し、名誉会員となり近年の学会情報は会報を通じて知る程度

である私にとって本企画趣旨に応えることは難しい。そこで、担当時の会誌編集の基本方針や編集の活動内容を紹介するにとどめ、会員の皆さんには、近年のそれらのあり方の是非と、今後の会誌のあり方について考えてもらいたい。

新世紀を迎えて学会は一つの変革を成し遂げた。審査体制を整備し、ルーティン化できる編集関連業務を学会事務会社に委託し、審査・発行の公正・迅速化を図ったのである。しかし、私が編集を担当したのは、従前の体制で会誌を発行する最後の時期であった。編集担当の常任理事は、自分の研究室に事務局を構え、有能な院生を編集幹事に迎えて、正しく手作りで会誌を発行するのである。ただ、その分だけ編集長の考えを存分に出せる自由度もあった。

私は、学会の発展が、とりわけ若手会員の積極的な活動なくしてはなしえないと考えた。会員としての活動は、弛まない日々の研究活動とその成果を学会大会で発表し、会誌を通じて広くその評価を世に問うことである。そのためには、会誌への論文投稿を誰でもが行える身近な研究活動の一環と彼らに受け止めさせる必要があった。

投稿された第1稿が未熟で完成度が低いものであっても門前払いをせずに、編集委員と2名の審査者、ときには第三審査者も加わって、何度も改稿を繰り返しながら、科学論文として完成するまで根気よく審査手続を進めた。これは、「審査」という名の、実質は学会を上げた「研究指導」であった。懇切丁寧な審査報告によって、たいていは2~3回の改稿を経て1年弱で掲載にこぎ着けていた。この過程は、論文の審査であるが、長い目で見れば、著者と審査者の努力と相互作用がその分野の研究の発展、ひいては社会心理学界の発展を支えた。

当時の『社会心理学研究』には、懐の広さ、器の大きさ、前例にとらわれない柔軟さがあった。斬新な研究テーマに対しても門戸を開き、既存の枠にはまらない研究に対しても真摯に対応する姿勢があった。多領域にまたがる研究ほど、審査結果が分かれて審査が難航する傾向があったが、著者と審査者が一緒に問題を検討し、解に向けて地道な努力を重ねた結果、今から振り返ってみると、そうした

研究が社会心理学の新たな発展のターニングポイントになった。

一方、若手の会員は、会誌掲載論文から自己の研究の着眼点や発展の方向性を見つけ出そうとするが、論文が体系的で研究の流れを広く展望するものであればあるほどその可能性は高いと考えた。そこで、論文のジャンルにモノグラフ的な特別論文を加えることにした。私が理事長であった2004年度に実現したが、残念ながら、最近はあまりその掲載がない。豊富な研究成果を蓄積する中堅、ベテラン研究者の一層の学界貢献を期待する。(たかぎおさむ・関西大学名誉教授)

機関誌編集委員長の経験を振り返る

大坊郁夫(2001~2002年度編集委員長)

2001年から2003年にかけて編集委員長を務めさせていただきました(当時の会長は高木修先生でした)。その頃のことを振り返ってのコメントをとの依頼を受けましたが、なかなか子細なことは思い出せませんが、この時期の特徴として大きくは以下の2点がありました。

一つは、この時期から本学会は、それまで担当常任理事等がかなりの人的エネルギーを注いで学会活動を支えてきたのですが(この基本は現在も同じですが)、学会事務作業の外注化を始めたこと、二つには、時代の趨勢を反映して電子化が進められたことです。学会ホームページの充実、Eメールの活用などです(この時期から、HPで会員検索も可能になっています)。これらは高木会長の時代趨勢を見通した方針を反映したものです。

当時の記録を手繰ってみますと、

(1) 著者の負担を前提にしてですがカラー印刷可能とする (2) 当該研究で用いたデータを著者は少なくとも5年間保存の義務を負う(これについては今も徹底しているでしょうか) (3) 論文ジャンルとして資料論文の新設 (4) 論文概要をホームページに掲載 (5) 4号体制への移行の検討を開始 (6) 論文連名者としては非会員を含めていいか否かの議論(賛否両論があり、当時は見送られました。これは、現在の動向のつながる契機になっているのではないかと思います)などがあります。

カラー図表の掲載などは、雑誌のweb掲載が進む現在では、容易に推進されてもいいことのようにも思います。また、データ保存の義務化は、実証的な研究を行う上での基



本的な倫理に基づくことです。データの出处(その研究を何時、どこで実施したか、対象者の人口学的属性)などは、ごく基本的なことですが、最近の論文にはこれらの情報に触れられていないことに危惧を覚えるのは個人のみなのでしょうか。

当時の編集作業のことに少し触れておきましょう。編集幹事の作業はなかなかたいへんなことでした(当時の大阪大学の院生であった後藤学氏)。これ以降は電子化が進んだので状況は異なりますが、当時は、投稿者や担当編集委員、査読者とのコミュニケーションはすべて郵送でした。投稿論文を担当委員に送り、査読者が決まると査読者に郵送。査読結果を受けて投稿者に送る。この繰り返し、連続で、幹事はひたすら郵便局を往復していました。当時は幹事を引き受けるとその期間には自分の研究が滞るとさえ言われたものです(実際に自分の研究に時間を割くのは厳しかったと推測しています)。これは電子投稿になって格段に改善されたはずですが。

何らかの学会の仕事を引き受けた人は分かるはずですが、正しく「ボランティア」活動の担い手によって学会活動が行われています。しかも、査読が迅速に戻ってくる、掲載が決まれば、迅速に掲載されることが当たり前です。それが滞れば、会員は大きな不満を抱きます。これは、当然皆が期待する学会活動の一面です。その陰では、地道なボランティアがいてこそ学会は成り立っていることを改めて認識したいものです。

(だいぼういくお・東京未来大学)

※大坊先生による「日本社会心理学会が、今、そして、これからめざすもの」を「社会心理学事典」(丸善)でお読みいただくことができます。

学会の発信力を高める

吉田俊和(2003~2004年度編集委員長)

筆者が『社会心理学研究』の編集を担当していたのは、2003年4月~2005年3月の2年間です。このころは、年間40編近くの投稿があり、年4号体制が議論されていました。査読も大変になり、忙しい理事を編集委員会から減らすために規程を改正し、若手を登用したことを記憶しています。それでも、査読が遅いと苦情が寄せられていました。これを解消するため、高木会長(当時)の発案で、心理学の他学会に先駆けて、電子投稿システムを導入しました。国際文献印刷社の笠井健氏(現・国際文献社社長)と元吉忠寛氏(現・関西大学)のお二人が中心となって、完成さ

せてくださいました。当時としては、画期的なことだったと自負しています。

昔話ではなく、本題である『社会心理学研究』の今後、日本社会心理学会の行く末について、簡単に私見を述べさせていただきます。最近の潮流として、発信力が重視されています。学会誌である『社会心理学研究』で、毎年、英文号を1冊刊行することを提案します。いきなり海外誌というのはハードルが高過ぎる会員にとっては、まず国内学会誌の英文で海外に発信するというのもありかと思えます。現在の財政状況からすれば、英文号年1冊の刊行は可能かと思えます。ぜひ、若手研究者のためにも御一考いただきたいと思えます。次に、時代を映すトピックの特集論文を『社会心理学研究』に掲載することです。「社会」という冠が付いている学会の機関誌として、世の中に発信していく義務があると思えます。マスコミに局所的にしか伝わらないコメントではなく、トピックに対する学問としての発信力を試していただきたいのです。例えば、公開シンポジウムのテーマは学会が主体的に決定し、そのテーマと連動させて特集論文を企画することも一つの手段かと思えます。若い研究者が、社会心理学者を標榜して生き残っていくため(学術振興会の研究員への採用、科学研究費の獲得)にも、社会心理学会全体の発信力を高めていくことが重要かと思えます。

(よしだとしかず・岐阜聖徳学園大学)

アイデア出し合って

安藤清志(2005~2006年度編集委員長)

研究者にとって、研究は「論文」という形に仕上げることによって一応の区切りがつく。その論文をどの雑誌に投稿するかは研究者が決めることであるが、社会心理学会の会員は、その選択肢の一つに機関誌『社会心理学研究』があることになる。一方、学会にとっては、『社会心理学研究』は、年次大会における発表とならんで学会員の研究成果を世に問う場であり、学会活動の二本柱となっている。当然、『社会心理学研究』の評価は学会そのものの評価につながる。

優れた論文が掲載される魅力的な機関誌を発行する学会は、多くの研究者が入会を希望

することになるだろう。そこで、学会としては、掲載される論文の質の高さを担保するという条件のもとで、投稿された論文の質を高めるための「会員サービス」を行う。この作業を担うのが編集委員会であり、掲載論文が一定の水準を保つためのゲートキーパーとなりながら、投稿者との具体的なやり取りの中で論文が掲載可能となるようにサポートを行うことになる。

二年間、編集委員長の仕事をして感じるのは、編集委員や査読者となる会員の負担の大きさである。教育研究にエネルギーを注ぐかわら、前述の「会員サービス」の一端を担って審査をおこなう作業は、時間的にも精神的にも負担が大きい。もちろんサービス業ではないので無料奉仕である。「家庭サービス」と同じように、審査委員や査読者は忙しい仕事(自分の研究)の合間から、後進の育成や学会の繁栄のために貴重な時間を捻出するのである。これからも、『社会心理学研究』は、こうした会員の負担を考慮しながら、「サービス」と学会誌の評価向上を目指して工夫を重ねていくことになる。

その際、ただ本学会の内部事情を考えるだけでなく、日本の心理学界の動向にも目配りをしながら機関誌を育てていくことが大切だと思う。特に問題になるのは「国際化」であろう。かつて本学会では、将来英文誌を刊行するという目標のために特別予算としてかなりの額が基金として蓄積されていた。当時の社会心理学会が自ら世界に向けて発信する気概をもっていたことは尊敬に値するが、その頃に比べると学会は「心理学系」の会員の割合が増加し、国内外の雑誌数も飛躍的に増加した。投稿することだけを考えれば受け皿に困ることはない。英文誌を自前でもつことのコストを考えると、その刊行は現実的でないし、『社会心理学研究』を一部にせよ「英文誌化」することも、中途半端な方策のように思える。むしろさまざまな雑誌の特徴や審査のスタイルに関する情報を会員に提供したり、『社会心理学研究』の論文を英文化して発信する方法を検討するなど、段階において柔軟に「国際化」を促す方策も考慮されるべきかもしれない。学会が財政的に比較的余裕のある今は、「国際化」に限らずさまざまなアイデアを出し合ってその実現可能性を探るよい時期であるようにも思える。

(あんどうきよし・東洋大学)



さらなる高みに向け

浦 光博 (2013年度~編集委員長)

20XX年のある日。ある大学の社会心理学研究室での院生の会話。

A:「うーん、残念。社会心理学研究への投稿論文がリジェクトされてしもたよ」

B:「そうか、残念やったな。でもあそこはレベルが高すぎてちょっとやそつとではアクセプトされへんからな」

A:「そうやな、今回はあきらめて別の雑誌を狙うわ」

B:「どこにする」

A:「JPSPあたりを考えているんやけど」

B:「えー、もったいないよ。社心研の次やろ。なら、せめてPNASぐらいを狙わな」

A:「そうかな。まあ、考えてみるわ」

このような会話が本当に交わされるようになるのに何年かかるかは分かりません。しかし、私としてはけっして絵空事でも冗談でもないつもりです。学会機関誌の編集長を引き受ける以上、これくらいの目標は掲げたい。目標をいくら高く掲げても行動が伴わなければ意味がありません。だから、今回編集

委員長を引き受ける際に、具体的なミッションとしてデスク・リジェクションの制度化を自分に課しました。これによって、掲載に値

する質の高い論文の審査に集中して取り組むようになると考えたからです。そして、今年度の大会前日の理事会で審査規程の改定が認められ、大会初日の総会でも報告・了承を得ましたので、私としてはミッション終了。もう編集委員長を辞めてもいいと思っ

ます。というのは冗談半分 (半分は本気)。掲げた目標はまだあまり遠く、少しでも近づくためには次に何が必要か、考えているところ

です。選択肢の一つとして英文雑誌の刊行があるのではないか、という意見があるかもしれませんが。機関誌を国際化することで掲載論文の質的な向上が実現するのではないかと

いうことです。しかし、少なくとも私はそれを提案するつもりも推進するつもりもありません。機関誌を英文化したからと言って、そこに掲載される論文のレベルが国際的なものになるとは限りません。いや、そもそもそれ以前に、現在の『社会心理学研究』(以下、本誌)掲載論文のレベルはすでにかなり高いものになっています。英文になってさえい

れば、それなりのインパクトファクターを持つ国際誌にも十分通用するほどのものが少なくないと思っています。

もともと、それだけに審査は甘くありません。実際、本誌の採択率は約43% (2006年から2010年にかけての5年間の確定分)、つまり、投稿された論文の半分以上が不採択もしくは取り下げとなっています。さらに経年の推移としては、多少の上下を伴いながら採択率は下降傾向にあります。おそらくこの傾向は今後も続くでしょう。

いや、続いてもらわなければなりません。本誌の評価が高まり投稿論文数が増加の一途をたどり、それに伴い採択率が下降の一途をたどる。それが続けば、いつか冒頭の架空の会話が実際に交わされる日が来るかもしれません。いや、きっとそのときには雑誌名も英文表記になり、すべての論文が英文で投稿されるようになってはいるはず

です。つまり、本誌を英文化すれば掲載論文の質が高まって国際的レベルになるのではなく、掲載論文の質が高まり国際的レベルになれば、それに伴って本誌は自ずと国際化するはず

です。それが実現するのがいつになるのかは分かりません。しかし、もう一度言えば、すでに本誌に掲載される論文の多くは、国際的にも十分通用するレベルにあります。さらなる高みに登るための次の一歩ぐらいは、残りの任期中に踏み出したいと考えています。

(うらみつひろ・追手門学院大学)

200号の採択率は約43% (2006年から2010年にかけての5年間の確定分)、つまり、投稿された論文の半分以上が不採択もしくは取り下げとなっています。さらに経年の推移としては、多少の上下を伴いながら採択率は下降傾向にあります。おそらくこの傾向は今後も続くでしょう。

いや、続いてもらわなければなりません。本誌の評価が高まり投稿論文数が増加の一途をたどり、それに伴い採択率が下降の一途をたどる。それが続けば、いつか冒頭の架空の会話が実際に交わされる日が来るかもしれません。いや、きっとそのときには雑誌名も英文表記になり、すべての論文が英文で投稿されるようになってはいるはず

です。つまり、本誌を英文化すれば掲載論文の質が高まって国際的レベルになるのではなく、掲載論文の質が高まり国際的レベルになれば、それに伴って本誌は自ずと国際化するはず

です。それが実現するのがいつになるのかは分かりません。しかし、もう一度言えば、すでに本誌に掲載される論文の多くは、国際的にも十分通用するレベルにあります。さらなる高みに登るための次の一歩ぐらいは、残りの任期中に踏み出したいと考えています。

(うらみつひろ・追手門学院大学)

する質の高い論文の審査に集中して取り組むようになると考えたからです。そして、今年度の大会前日の理事会で審査規程の改定が認められ、大会初日の総会でも報告・了承を得ましたので、私としてはミッション終了。もう編集委員長を辞めてもいいと思っ

ます。というのは冗談半分 (半分は本気)。掲げた目標はまだあまり遠く、少しでも近づくためには次に何が必要か、考えているところ

です。選択肢の一つとして英文雑誌の刊行があるのではないか、という意見があるかもしれませんが。機関誌を国際化することで掲載論文の質的な向上が実現するのではないかと

いうことです。しかし、少なくとも私はそれを提案するつもりも推進するつもりもありません。機関誌を英文化したからと言って、そこに掲載される論文のレベルが国際的なものになるとは限りません。いや、そもそもそれ以前に、現在の『社会心理学研究』(以下、本誌)掲載論文のレベルはすでにかなり高いものになっています。英文になってさえい

れば、それなりのインパクトファクターを持つ国際誌にも十分通用するほどのものが少なくないと思っています。

もともと、それだけに審査は甘くありません。実際、本誌の採択率は約43% (2006年から2010年にかけての5年間の確定分)、つまり、投稿された論文の半分以上が不採択もしくは取り下げとなっています。さらに経年の推移としては、多少の上下を伴いながら採択率は下降傾向にあります。おそらくこの傾向は今後も続くでしょう。

いや、続いてもらわなければなりません。本誌の評価が高まり投稿論文数が増加の一途をたどり、それに伴い採択率が下降の一途をたどる。それが続けば、いつか冒頭の架空の会話が実際に交わされる日が来るかもしれません。いや、きっとそのときには雑誌名も英文表記になり、すべての論文が英文で投稿されるようになってはいるはず

です。つまり、本誌を英文化すれば掲載論文の質が高まって国際的レベルになるのではなく、掲載論文の質が高まり国際的レベルになれば、それに伴って本誌は自ずと国際化するはず

です。それが実現するのがいつになるのかは分かりません。しかし、もう一度言えば、すでに本誌に掲載される論文の多くは、国際的にも十分通用するレベルにあります。さらなる高みに登るための次の一歩ぐらいは、残りの任期中に踏み出したいと考えています。

(うらみつひろ・追手門学院大学)

(2) 会員が語る、「社会心理学と社会心理学者」の今

続いて第2特集では、学会活動の担い手である会員たちが、社会心理学をどう捉え、研究活動で何をエンジョイしているかを調査し、「社会心理学と社会心理学者」の今を描き出すことを試みました。会員の研究活動を学会としてどう共有し、どう社会に発信していくべきか、広報活動に関するご意見も頂戴しました。調査実施に際しては、対面で生の声を聞かせていただくことにこだわりました。

広報委員会アンケート結果報告

清水裕士 (広報委員)

会員の皆様には、社会心理学会大会当日のお忙しい中、iPad片手に会場を徘徊する広報委員のアンケートに快く対応していただき、誠に感謝申し上げます。さて、この場を借りまして、広報委員会が実施したアンケート結果を、ご報告させていただきます。なおアンケートの結果は、すべて無記名で集計されたうえ統計的に処理されますので、みなさまの個人情報外部に漏れ、ご迷惑をおかけすることはありませんのでご安心ください。

今回のアンケートは、会報200号を記念して、会員の皆様の社会心理学会の広報活動への接点の現状と要望をお聞きすることが目的でした。それに加え、会員の皆様が社会心理学に対して何に「興奮」しているのか、「社会心理学とは何か」についても答えていただきました。これらを共有することで、社会心理学および研究の楽しさについて再確認できればと思っております。

アンケートの対象者は、全部で129名 (男性88名、女性41名) でした。ただしサンプリングは広報委員の二人と (無理やりに) 目が合ってしまった方を対象とした、見事な有意抽出となっております。よって、サンプルの代表性は疑わしいものとなっておりますことをご了承ください。なお対象者の年齢層は、20代が33名、

30代が47名、40代が28名、50代が15名、60代が6名でした。

まずは社会心理学会の広報活動への接触についての報告です。複数回答可の質問で、広報活動への接触で最も多かったのは、「メールニュース」でした。113名 (88%) という多くの方が、メールニュースから社会心理学会の情報を得ていました。続いて、「ホームページ」と「会報」がそれぞれ58名 (45%)、52名 (40%) が挙がりました。最後は「Twitter」で、32名 (25%) でした。

広報活動への要望は、さまざまなものをいただきました。比較的多かったご意見が、「学会内部だけではなく、もっと外部に広報を」というものでした。専門でない一般の人に、社会心理学の有用性をアピールできるようなものを、というご意見でした。次に多かったのは、「研究会や勉強会の情報を流すだけではなく、整理してほしい」とのご意見でした。「研究会開催の情報は毎朝飛んでくるけど、忘れるから後で検索しないといけない」というご意見をいただきましたが、これはある意味、メールニュースによる情報配信が皆様に活発に利用され、多くの情報が飛び交っていることの証なのかもしれません。今後の課題として対応を検討できればと思います。あと、「社会心理学会のゆるキャラがほしい」という声もありました。はてさて、どうなることやら。

次に、社会心理学会の会員が、研究の何に「興奮」しているのか、についてご意見いただきました。図1をご参照ください。

最も多かったのは、「データ分析」で、続いて、「仮説構築」、「研究計画」となりました。「データ分析」を選択された方のコメントで印象的だったのは、「仮説が支持されたとき」と、「仮説が支持されなかったとき」という正反対の意見があったことです。思い通りの結果が出た喜びと思えない現実を目の当たりにしたなど、興奮の仕方にもいろいろあるようです。「データ収集」のコメントで個人的に興味深かったのは、「デブリーフィングで参加者が面白がってくれた時」でした。これはよくわかる気がします。

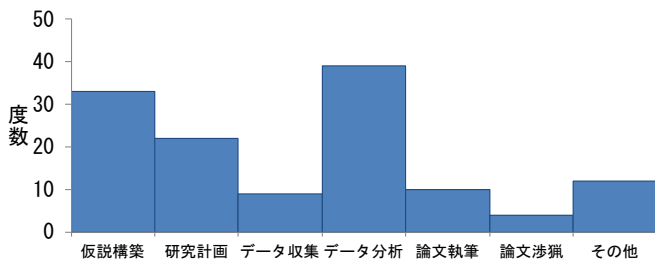


図1 社会心理学者が興奮する瞬間

最後に、「あなたにとって社会心理学とは？」という質問をさせていただきました。せっかく多くの「社会心理学のエッセンス」をいただいたので、テキストマイニングで分析をしました。まずデータを形態素に分解し、数量化したのち、クラスタ分析を行ったものが図2です。クラスタは4つを抽出しました。

第一クラスタは、「社会、心、説明、社会現象、データ、相互構成、道具、解決」などが並び、「社会現象の説明や問題解決のための道具」といったクラスタとなりました。第二クラスタは、一番単語が多く、「学問、相互作用、心理学、研究、科学、関

(3) 新聞記事が語る、「社会の中の社会心理学」のこれまでとこれから

ここまでの特集が社会心理学者による身内からの自己評価にもとづく論考であったのに対して、第3特集では社会心理学に対する世間からの他者評価に注目しました。他者の視点の代表として新聞記事を手がかりとして、社会心理学が言及されてきた程度と内容を分析し、社会心理学と社会の関わり方について小さな1つの提案を試みます。

Social Impact of Social Psychology 三浦麻子 (広報委員)

【問題】社会心理学と社会との関係はいかにあるべきか。社会心理学は社会にいかに対するべきか。日本社会心理学会(編)『社会心理学事典』の「刊行にあたって」には以下のように記されている。

社会心理学の研究は、人が含まれる場をプロセスとして捉え、そこから得られるものがわれわれにとって現実的な意味あるものでなければならない。(中略) 社会的現実を適切に捉え、明確な実証性を持つ社会心理学であるからこそ、その研究成果を社会へ還元する責務がある。社会的リアリティのある綿密な研究を旨とすべきなのである。(大坊, 2009)

個々の研究がすぐに「現実的な意味あるもの」となり、直接的に「社会へ還元」されるとは限らない。上記の主張は、よりメタ的な意味で、社会心理学的研究は完遂までの里程に社会還元という目標を置くべしということだろう。では、全体的に見て、社会心理学はそれを果たしてきたのだろうか。

本稿では、社会心理学の「ソーシャル・インパクト」、すなわち研究成果の社会還元の現状を知る手がかりとして、マスメディア

わり・・・」などが並びました。これは「日常的な疑問を解明する学問」といった解釈が可能でしょうか。第三クラスタは、わかりやすく「マイクロ・マクロダイナミクス」ということでしょうか。

最後の第四クラスタは、「個人、状況、行動、心理過程」でした。勝手な解釈ですが、「個人の心理過程と状況で行動を予測する」ということでしょうか。どれもこれも、確かに社会心理学の「エッセンス」をつかんでいるように思います。

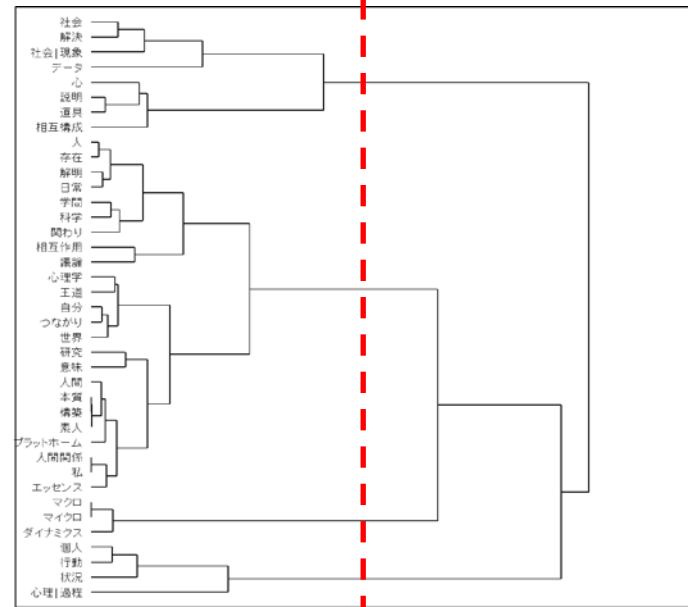


図2 社会心理学のエッセンス クラスタ分析結果

以上が、広報委員会アンケートの集計結果のご報告です。ついに200号となった会報ですが、今後も会員の皆様が便利で使いやすい広報活動を展開できるよう頑張ります。

(しみずひろし・広島大学)

に登場する社会心理学の姿に着目し、会報100号が刊行された1985年以降の推移を分析する。その是非は別として、マスメディア発信の情報への信頼度は非常に高い。研究成果の流通は、となく業界内、よくてアカデミアの中で完結し、一般市民からは難解で縁遠い存在と見なされがちだが、マスメディアに採り上げられることで信頼性が担保され、理解可能な情報として普及するきっかけが与えられることがある。また、マスメディアが「社会を映す鏡」であるとするれば、そこで報道される「社会心理学」のあり方は、社会心理学に対する社会からのニーズを示唆してもいよう。

【方法】新聞記事を対象にデータを収集した。3つの全国紙のWebデータベース(朝日新聞「聞蔵II ビジュアル」・毎日新聞「毎策」・日本経済新聞「日経テレコン」)を用いて、対象期間を1985年1月1日(毎日新聞のみ1987年1月1日)から2013年6月2日として、タイトルか本文に「社会心理学」を含む記事を検索した。

【結果と考察】1465件(朝日716件、毎日480件、日経269件)の記事が抽出された。当然、これらが社会心理学に関する言及を含む全新聞記事ではない。また同期間に「心理学」(「社会心理学」も含まれる)に言及した記事は16092件、例えば「臨床心理学」

でも1792件であったことを考えれば健闘の部類なのかもしれないが、3紙合計でこの件数というのは、社会還元の実現値としてはやや寂しいかもしれない。

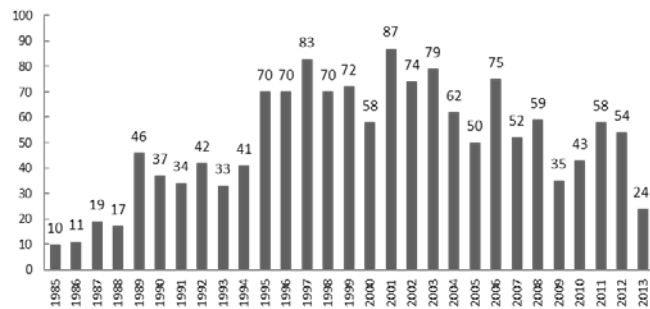


図1 「社会心理学」言及記事数の時系列推移

ともあれ、記事件数の増減を「社会が社会心理学に求めるニーズの高さ」の変動を示す指標であると考えて、時系列変化を概観してみよう。図1に示すとおり、ごくわずかだった言及数が増えた局面がまず1989年にあり、1995年にも大きく数を増やしている。世紀の転換期を挟んだ10年弱が今回の対象期間の中では言及数がピークの時期にあたり、ここ数年は言及数がやや少なめである。

表1 「社会心理学」言及記事の内容分類

カテゴリ	記事数	比率(%)
コメント	653	44.60%
事件・事故関連	255	17.40%
災害関連	89	6.10%
その他の社会事象関連	309	21.10%
紹介・解説	433	29.60%
研究機関	45	3.10%
研究(実験・調査)	79	5.40%
研究(理論)	43	2.90%
書籍	83	5.70%
人物	91	6.20%
イベント(教育)	59	4.00%
イベント(研究)	33	2.30%
その他報道	212	14.50%
人事・訃報	111	7.60%
人事	35	2.40%
訃報	76	5.20%
広告	56	3.80%
総計	1465	100.00%

次に内容分析を行った。まず5つの基本カテゴリを設定した。何らかの社会事象に関する報道に社会心理学者のコメントが付随する「コメント」記事、社会心理学に関わるモノ・ヒト・コトが主眼となっている「紹介・解説」記事、これら2つや「人事・訃報」「広告」のいずれにも当てはまらないが「社会心理学」に

言及のある「その他報道」記事である。「コメント」「紹介・解説」「人事・訃報」には言及対象に応じた下位カテゴリも設定した。

抽出全記事の内容を精査してカテゴリ分類し、表1に記事数と出現比率をまとめた。「コメント」カテゴリの出現比率がもっとも高い。また、総計と各カテゴリ間の記事数の関連を検討したところ、「コメント(事件・事故関連)」との間に高い正の相関が認められた($r=.81$)。他のカテゴリとの相関は中程度(「人事」($r=.30$)~「その他報道」($r=.68$))であった。これらのデータは、社会心理学の社会還元への典型的ニーズとして、社会的影響力の大きな事件・事故の発生に応じてその解釈可能性や対応策などを示す役割があることを示唆している。いささか逆説的な表現をすれば、社会心理学がマスメディアからの注目を(過剰に)浴びないことこそが、社会が平穏無事さを維持していることの証左かもしれない。

「社会心理学」を含む記事数が顕著に増加した1989年と1995年についてその言及内容を詳しく検討すると、きっかけとなったイベントは両者で対照的なものであった。まず1989年の記事を見ると、8月後半以降に記事数が増加(28/46件)していた。増加のきっかけとなったのは多くの「その他報道」記事の登場で、具体

的には「礼宮さま・川嶋紀子さん婚約」を報道する記事である。この国民的ニュースにより、紀子さんが専攻している社会心理学が広く世間的認知を得て、その後の言及記事数の増加をもたらすきっかけとなったのかもしれない。秋篠宮妃となった紀子さんは、公務や子育てに多忙な日々の中でも、現役の研究者、そして社会心理学会の会員として活動を続けている。一方で1995年は、悲しく忌まわしい記憶を伴う大きな災害と事件—阪神大震災とオウム真理教事件—が日本を震撼させた年であり、これらに関するコメント記事が多くを占めていた(40/70件)。社会の平穏無事さを失わせた事象をどう解釈すればよいのか、それらとどう対峙すべきか。緊急事態にこそ、社会から社会心理学的な観点が求められているといえそうだ。2011年と2012年の記事にも東日本大震災に関連するコメントが多い。200号記念特集(2)で紹介した会員調査「社会心理学のエッセンス」のテキストマイニングで「社会現象の説明や問題解決のための道具」クラスが抽出されたのとおり、こうした社会からのニーズはわれわれの社会心理学という学問に対する自覚と整合的である。実現値の絶対数は少ないとはいえ、社会からのニーズと社会心理学のもつシーズは合致している。

「紹介・解説」では重大な社会事象からごくありふれた社会行動に至るまでバラエティに富んだトピックが取り上げられており、そこに特定の傾向を把握することは困難であった。しかし、記事の主眼が研究内容(実験・調査、理論)や研究者個人などに向けられるので、「コメント」記事では短く切り取られた「識者の意見」のみが掲載されてその背景としてあるはずの研究知見や理論が紹介されることは稀(29/653件)であるのに比べると、必然的に内容は豊かであった。こうした記事のもつニーズは、前掲「社会心理学のエッセンス」分析で抽出された「日常的な疑問を解明する学問、人間の本質を知るための学問」クラスと通底している。

【展望】本稿では、マスメディア(新聞)による社会心理学に関する言及についてデータを収集・分析し、「社会の中の社会心理学」の位置づけを知ることを試みた。1980年代半ばよりマスメディアへの登場頻度は増えており、社会心理学のソーシャル・インパクトはある程度向上したと考えられる。また、世間的な「社会心理学」に対する見方と社会心理学者が旨とする「社会心理学」のあり方にもずれはない。そういった意味で、社会心理学の社会還元は適切なあり方で実現しつつあるだろう。しかしその絶対数は決して多くなく、また還元のニーズとしては「有事対応」が多くを占めていた。社会心理学と社会の関係はおおむね円満だが、絆をより強固にする余地はまだまだありそうだ。

絆を強めるより豊かな社会還元を目指すとするならば、実際のところ何ができるだろうか。まずは研究者として当然の行為として、社心研等の学術誌への論文投稿や書籍出版などにより研究成果を公刊することだろう。それ以外に何かと問われると、特に社会心理学の中でも社会生活の「現場」からの距離がやや遠く、直接的な社会還元の機会を想定しにくい領域やテーマの研究者は、社会のニーズを満たす的確なシーズの提供は容易ではないと感じ、手をこまねいてしまうかもしれない。また、われわれはどうしても社会を研究対象として見てしまいがちで、社会還元の際しても「この知見を提供すれば、社会にこう還元される」という仮説を設定し、実証的データによる支持を期待しがちでもあるかもしれない。

しかし、社会からのニーズがいつどんな形で生じるかは統制不可能で、それをあらかじめ想定したシーズの提供は困難である。ゆえに、決め打ちのアプローチは徒労に終わる可能性が大きい。

そのような状況でわれわれが個人レベルでできる試みの一つとして「ゆるく、しかし着実な活動」を提案したい。それは、ともかく手持ちのシーズを取捨選択せずにばらまくことだ。下手な鉄砲もなんとやらである。自らの研究知見へのアクセシビリティを広く社会に向けて高めることが、ひょっとしていつかどこかで社会のニーズに応える芽を出すかもしれない。100号刊行当時とは異なり、現在はほとんどコストをかけなくても研究者個人によってそれを実現させられる環境が整っている。そう、インターネット上に置けばよい。例えばもしあなたがツイッター利用者なら、「こんなテーマを扱ったこんな論文出しました」「今日のあの話題、私のこの研究と関連がありそう」と(もちろん書誌情報 URL つきで)つぶやくだけで、日常的コミュニケーションに気軽にシーズを埋め込める。それがもし社会の関心を捉えれば、綿毛のついたタンポポの種のようにリツイートによって遠くまで運ばれ、各地で芽吹いてくれるかもしれない。マスコミはソーシャルメディアに手広くアンテナを張っているから、それに掛かるかもしれない。低期待だが、低コストで低リスクである。

そこを学会(広報委員会)が仕切ってくれよという声が聞こえてきそう。会員調査でも一般市民に向けた広報活動を求めるご

社会心理学はどこに向かうのか。社会心理学者はどこを目指して歩けばよいのか。明確な答はないでしょう。個々の研究者たちが、先達の切り拓いてくださった轍を、日々のごく小さな、しかし確実な知的興奮をエネルギーにして辿りつつ、いつかわれわれの関心の対象そのものである社会の中で芽を出し花が咲き、実がなるようにと願いを込めて研究という種を蒔きながらさらに先を目指す。そんなミクロレベルの日常的行為の積み重ねが、いつかマクロレベル、すなわち社会心理学それ自体の創発を産み出す、かもしれません。いやしくも社会心理学者を名乗る限りは、そんな期待を持てる、あるいは持たせるような研究をし続けたいものです。そして、望むらくは、個々の研究者が轍を外れて迷い道に入り込みかけたとき、日本社会心理学会が羅針盤や灯台の光となりうる存在であらんことを。

祝・山岸俊男会員 文化功労者顕彰

このたび、山岸俊男先生(東京大学特任教授・北海道大学名誉教授)が、平成25年度文化功労者の顕彰を受けられました。顕彰の理由は「社会心理学における「社会的ジレンマ」の研究を多人数の相互作用の結果生じるマクロな現象としてとらえなおすとともに、これまでの「信頼」研究における、信頼される側と信頼する側との双方からのアプローチを統合することによって、社会科学全般に应用可能な理論的・実証的基盤を提供し、学術の発展に貢献したこと」によるものです。本顕彰を受ける心理学者は3人目、社会心理学分野では初の栄誉となります。心よりお祝い申し上げますと共に、先生の長年にわたる社会心理学会へのご貢献に心より感謝いたします。

山岸先生から、本学会と会員の皆様に向けてメッセージを頂戴しました。

この度、思いもよらず文化功労者の顕彰を受けることになり、身に余る栄誉に感激しています。心理学と社会科学という二人の巨人の肩に片足ずつかけることで、一人の肩に乗っているだけでは見えてこない彼方を見てやろうという野望に振り回されながらも、これまで何とか巨人たちに振り落とされなくてやってこられたのは、故南博先生、故リチャード・エマソン先生をはじめとする先達の諸先生からの温かい励ましと、亀田達也先生や故篠塚寛美先生をはじめとする同僚の先生方や学生の方々からの強力な援助があったからだに感謝しています。そろそろ私の研究者人生も日暮れに差し掛かろうとしています。まだ目的地の姿さえ見えません。それでも絶望に陥らないで研究を続けていられるの

意見をいくつも賜った。しかしここではあえて「まず、皆さんご自身で(も)お願いします」と申し上げたい。インターネットでは個人研究者も学会も発信力や信頼性評価は大して変わらず、発信する情報が与えるソーシャル・インパクトに有意差はない。むしろ学会は組織であるがゆえに迅速で柔軟な活動は難しい。学会は会員の研究成果をオーサライズする機関として、その成果(社心研掲載論文や大会論文集)がネット上で参照できる環境を既に実現している。社心研のオンラインジャーナル化もそれをより充実させる。情報の一次ソースである皆さんがこれらを活用して下されば、学会の提供したシーズは芽吹き、より美しい花を咲かせるだろう。

【結論】学問のソーシャル・インパクトを高め、有為な社会還元を行うことは、社会心理学の本来の責務であると同時に、昨今では社会から学術界全体に対する強い要請ともなっている。本稿で紹介した記事データは「あなたたちの研究活動はこんな風に必要とされていますよ」という社会からのメッセージだと捉えたい。社会のニーズに応えられるかもしれないシーズを探し手に発見されやすいような形で数多く提供する活動は、研究者個人にも十分にできる。いや、むしろそうすべきである。

皆さんが蒔いたシーズを拡散させよというご用命は、いつでも広報委員会までお知らせくださいますように。

(みうらあさこ・関西学院大学)



は、日々の研究生活の中で苦楽を共にしてくれる若い仲間たちに囲まれているからです。先達、同僚、若い仲間、そして長年にわたり研究生活を陰で支えてくれた妻みどりに恵まれたという幸運に感謝しつつ、こうした多くの方々からの励ましと援助に応えることのできる研究成果を生み出すために、残された時間を無駄にすることなく使っていきたいと思っています。最後になってしまいましたが、これまで学会大会の場や研究誌上で御批判や御意見を賜りました先生方、またそうした研究交流の場である社会心理学会を維持するために献身的にお働きくださいました先生方に対し、深い感謝の意を表明させていただきます。

(写真提供：北海道大学社会心理学研究室)

「春の方法論セミナー」に是非ご参加下さい!!

大会総会・学会ホームページ等で既報のとおり、今年度組織された新規事業委員会（藤島喜嗣・橋本剛・竹澤正哲（以上、理事）、稲増一憲・清水裕士（以上、会員））により、研究スキル向上や最新動向の共有を目指した各種イベントが企画・実施されることになりました。第1弾として「春の方法論セミナー」が下記のとおり開催されます。会員の皆様方の積極的なご参加をお待ちしております。

日本社会心理学会 春の方法論セミナー

「あなたの実験結果、再現できますか？ : false-positive psychology の最前線」

日時 2014年3月17日(月) 13時~18時(予定; 12時半開場)

会場 上智大学四谷キャンパス3号館5階521教室

参加費 無料(会員以外の参加も可)

司会 清水裕士(広島大学)

講師 竹澤正哲(北海道大学) - 社会心理学における再現可能性問題の概要

大久保街亜(専修大学) - 再現可能性問題に対する諸関係領域の動向

岡田謙介(専修大学) - 仮説検定における再現性の問題と新たな方法論

URL http://www.socialpsychology.jp/sympo/seminar_140317.html

さらに来年度以降開催予定のいくつかのイベントも企画進行中です。随時告知いたしますので、楽しみにお待ちしております。

* * * * *

『社会心理学研究』掲載予定論文

■第29巻第2号(2013年12月刊行)

《原著》

佐藤浩輔・大沼進「公共的意思決定場面において当事者性と利害関係が信頼の規定因に与える影響」

吉澤英里「聴衆の存在と話者の拒否回避欲求がスピーチ予期時の生理心理的反応に及ぼす影響」

■第29巻第3号(2014年3月刊行予定)

《原著》

小林江里香・深谷太郎・杉原陽子・秋山弘子・Liang Jersey「高齢者の主観的ウェルビーイングにとって重要な社会的ネットワークとは:性別と年齢による差異」

田村美恵「競争的・非競争的な集団間関係と自己もしくは内集団他者の手がかり情報が合意性推定に及ぼす影響」

塩谷芳也「東日本大震災における軽度被災者のメンタルヘルスに対するソーシャル・サポートの負の効果」

《資料》

中原純「シルバー人材センターにおける活動が生活満足度に与える影響—活動理論(activity theory of aging)の検証—」

川上直秋・菊池正・吉田富二雄「字のクセを好きになるか?:筆跡に基づく単純接触効果の般化」

会員異動(2013年9月18日~2013年12月6日)

■新入会員

《正会員》

・一般会員:後藤晶(山梨英和大学人間文化学部助教)、林治子(東京女子大学非常勤リサーチアシスタント)

・大学院生:梶村昇吾(京都大学大学院教育学研究科)

■退会者(すべて自然退会)

井川浩佑、石田彩夏、泉谷絵里香、岩倉希、榎本博明、海老原優、大村遼、鍵山琢実、加藤理、加藤力、金子泰雄、衣川由美子、木村登紀子、関瑜、國仲瞳、窪田慎也、古賀真理子、後藤幸恵、小浜駿、小林厚子、島村知秀、周群、シューグ ジョアンナ、杉本崇、関口恵美、高橋直、千田一輝、鄭成溶、土井田祐介、中畝菜穂子、中里和弘、中島耕三郎、長田真由子、中村功、中山奈緒子、名久井俊彦、成田恭代、西本裕輝、延岡佑里子、馬場洋香、浜村武、原川智子、潘怡安、平田万理子、広瀬弘忠、藤井千絵、箕口雅博、水上祐子、三井宏隆、穆旭明、本島正人、藪口莉那、山口結花、山本知穂、楊淑君、吉富千恵、李珠、劉暢、渡辺成、王舸

■所属変更

沢宮容子(筑波大学人間系)、浦光博(追手門学院大学心理学部)、日向野智子(東京未来大学こども心理学部講師)、永房典之(新渡戸文化短期大学生活学科准教授)、山田歩(帝塚山大学講師)、早瀬良(中部大学生命健康科学部講師)、中島健一郎(広島大学大学院教育学研究科)、堀田結孝(国立情報学研究所ビッグデータ数理国際研究センター特任助教)、横山ひとみ(東京農工大学大学院

工学研究院特任助教)、神原歩(京都学園大学教育開発センター講師)、滑田明暢(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構専門研究員)、遠藤(藤)寛子(筑波大学人間系附属学校教育局助教)、山形伸二(九州大学基幹教育院准教授)

編集後記

熱(暑)かった年次大会@沖縄報告、200号記念特集に加え、山岸先生文化功労者顕彰の朗報もお伝えできた本号を読み終えてのご感想はいかがでしたか。「せっかくだから面白いことしませんか」と口走ったが運の尽き。記念特集の企画のみならず、会報全体の編集・制作も担当する羽目になったヒラ委員による一世一代の編集後記です。痛飲した忘年会の帰路に「おまかせします」メールを見た時には酔いが吹っ飛びましたが、他ならぬ記念号にこんな機会を与えて下さった委員長に感謝。寄稿者の皆様のタイトなメットの遵守と編集幹事の范さんのシビアなページ割の工夫にも最敬礼。なお本号はオンライン版に加えて冊子版もお届けしますので乞ご期待!(三浦麻子)

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。
E-mail: jssp-post@bunken.co.jp
掲載料:1件(1回あたり)1,000円(後日事務局より請求書をお送りします)